



色
集
集
一



中村俊定文庫
文庫 18
713
1



芭蕉翁一坵俳諧

增補

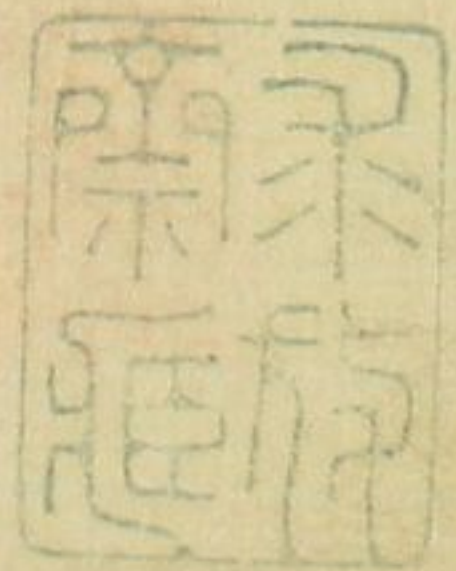
幽蘭集

全部七冊

尾藩 暮雨巷臥央著



幽蘭佳本序



Handwritten text in cursive script, likely a preface or commentary, written in black ink on aged paper.



浄土の心持をいかに
清くしむるべきか
の心をいかに
の心をいかに

朱持の士朗

笠をかき逢の雨はほろほろひ
とまじくこれわらふもあはれ
ほろほろと人かたありけ
るまじくむしねあはれ
たふらふとあはれ

ねる風れあはれ
たふらふとあはれ
あはれのまじく
かたはれあはれ
初解のほろほろ
白のらりり

芭蕉
聖水
荷兮
重五
杜因
正平

家いほひのうたに高うはわさうちて
髪とやひのうと一のふきのうと
いつもそれつとと乳をきけり
ききぬ率のうたよとととと
新にた境はじく火とたき
わさうたのうたよとととと
田中へうと小まん柳あうと
旁よあひ川一人からんこ
貴方と横と泳と月ほう
とあうとあうととととと下りあう

水 意 兮 五 意 兮 五 意 兮 五 意 兮 五

二乃尼よを湯のそれのゆりさく
膝ハむらうとととととととと
宗物ふさうとととととととと
今うとととととととととと
登人乃紀念のふきのうととと
志はうととととととととと
笠ぬきととととととととと
あうとととととととととと
とととととととととととと
鳥絨ハえひとととととととと

あ 意 兮 五 意 兮 五 意 兮 五 意 兮 五

わりれさの漣もろけー部と
 秋水一斗りり居る人想や
 日東北孝白坊小月とみ
 中小木横とと心路色くら
 牛の糸とやと羊れ夕くれ
 笠と鯉コノヒロの魚をいさき
 象いのり境の序一守心へ
 夕まいりよの眉ととにゆふ
 後まへ居湯と志賀のむす
 序下の藤のけつとよりり

五 必 有 分 必 意 兮 五 意 有

ねんじの淋
 いささくもを振る人

ころつるれととも襦ろく帰
 一母よまことと 藤乃食
 聖と来りて尋ね候のねをい
 うつふんれと車もよたり
 磨の月神不鞆鼓とあはれん
 枕花をたをる 貞徳の夏

野水 杜園 芭蕉 為分 重五 正年

雨に終る海香れ田螺にけりうきて
 負のきりくよと 六ふとくたき
 床海く流れいりこなりれ
 縁巾るしひれ 恨のこりし
 口をくくと痛^{フスハ}をらまるちり
 明るハくくきたに 首おろりきむ
 小三たよ壺とせりら観
 月ハほうりれ牡丹ぬれ人
 縄網のけきハヤうれ壺落く
 こつくくよのく地蔵切所

分五五五水五分

秘記の世とてや嫁れいふく
 かあろいふくのきうくハゆい
 柳^ヤ葉の隣る園ほのき
 うらひを起と身智くはう
 篠ふくく桐之枝れ葉は
 三緑くむ 不破の園人
 今ちけくくとく流て打る基と
 祢^ニあめくくのりて七七
 奉加めれ流きに連うら存
 を川^ニの傘れ下きりあ

分五五五水五分

蓮池小澄れ子抄ふ夕るれ
 窓より子つゝ扇帳を下り
 月小まゝ座輪れ燈の赤く似
 煮せぬさめし臨濟をまの
 秋蟬のうに聲すまの川さ
 友のうまつゝふ来けりちり
 猿を硯をむき心ひり
 むらハ典侍の扇、内侍
 乙のふあむ尾長の鳥いし
 ーしーいむ 越のーとら
 水 窓 水 窓 水 窓 水 窓

信急をむく事

僅り十歩

つみこも月より扇帳のれ
 水みりり あれいふ信乃
 齒袋れ糸をくら持人の矢よ扇
 水乃御つとれ一明のそ
 ち養うくあまに風のしら
 茶の湯志惜むゆくのたんり
 杜國 重五 聖水 成 若 正平

幽卷一

花見のついでに娘の居る
燈籠のふりかへりて
あなただけの力を
書き出さず
明月を双六に
おぼえ
馬のわさそ
おのづかの
南のきこは
佛の

五 玉 水 今 五 水 今 五 葱

^{アガタ} 縣の
五 形
魚乃馬の
とや
店
拵
魚の
獲

五 玉 水 今 五 水 今 五 葱

わさ人と指を枕ふのこぼれ
芥子の匂とくすねをこぼれ
三日月れ来ハ暗く経れ
梅樹の影に 空の月 者
煮る事をやしてを煮る
くまよきと云佛一やよを煮る
けりけり新燈消く 起る
おのひつのも 夜の帯川
こいれ 髪よほすの 花のうけ入
うれ 唇の白を 象もたれ

五 水 五 水 五 水 五 水 五

能波はる 芦や 焼も 家ハ

丁のけきしを

炭賣れ已つるうきり
人乃 務いを 切る 寒
花蘇馬骨れ 霜の候
宿々 新まとの 月うけ
風吹ぬ 杖の 日瓶 酒さき
蘇藏り 巾を 市に 振す

重五 荷兮 杜國 野水 芭蕉 羽笠

実茂川や卯鹿子代奈やそ
 いとくらの齋ながらしとく
 卯子事一布搦おふとり
 うきはくくらしを残る。三年ニルカホ
 控れてく移る。齋れれ是香
 大たわね 火炸あき人をん
 門守の翁お致おしりて舞。
 血りされくは月の暗きに
 夢ありて本口乃 待 七つ支
 冬まの 納豆たぐく

水 小 兮 五 蕉 笠 小 水 子 兮

花う泣あぐれ懣とすてよ
 傍ものいんは 歎きを唇
 白燕 涙わあまを流し
 宣旨くく 釵を結る
 八十手をとつたる妻も母おく
 かりらるひる。七夕のつる
 西菊一桂のそれのつぼむ時
 葉のあふふト木うつ音
 街。あふ賢ある女をて
 船瓶一 葉を流し日のれ

兮 五 蕉 笠 小 水 五 兮 笠 蕉

とやり来て梅子くちる正月も
鼓 手 白 紙 弁 茶 の 宮
寅 の 日 の 旦 を 雛 居 の 痰 起 ぐ
ま け ぐ ぐ ぐ 南 京 志 地
い ぎ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ 人 乃 像
泥 ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ 芥 の 根
粥 ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ
袴 衣 の 下 ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ
水 の ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ
糸 ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ 雨

水 葱 笠 五 水 葱 笠 水 小

田家肥望

霜 月 や 鶴 の 行 ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ
冬 乃 於 日 れ あ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ
櫻 梅 心 象 の 体 を 本 ぐ ぐ ぐ ぐ
印 ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ
膏 ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ
酌 ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ

荷 兮 芭 蕉 重 云 杜 四 相 笠 聖 水

秋のころ旅の由連歌いとり
 漸く々々不二人ある寺
 舞とくく桂のふれ落る音
 柔と系ゆふをうむる風の香
 旅子並りお屏りの女と二十
 遊り本音作る 恋れ旅衣
 夏よこよ山橋ふわくくみむ
 麻りりとらふ歌の集あそ
 江をたぐく宿樂庵と世を換く
 家月出さる月ハ母ほろろる

五 五 蕉 兮 笠 水 五 五 兮 蕉

旅衣笛く為心をうら折ひ
 翁輿ゆるは 木尻の山石
 骨をみるくおふあこい打り
 乞食の義をもくふ志のめ
 泥のくお尾をむく紐を指ひて
 御幸小をむお水の御菜
 毎々照もこれ小菊夏の心あり
 萱の家満りく産園つく白
 芥子尼乃小坊走くおむれく
 をおくくおのふと立る道のみ

蕉 兮 笠 水 五 五 兮 蕉 水 笠

群一市一飯堂のうく月のふ
 義打くまろも月や影も
 釣村小屋根うれも。斤鹿
 夏腐片けりく。母の喪小入
 之政の草一の枝も破ぬへー
 伏見本懐の待糸をう川
 いろあまこを糸こもろを控めて
 是の——の喜とをよま
 水子秀白の雪もやた
 山菜花もほよ笠のたうら

五 玉 笠 水 蕙 兮 玉 水 笠

海へれて鴨れ勢ほのうに白
 串小鯨を焙る 鰯 サカツキ
 二百長糸げ山小斧とりそ
 櫻乃程よく秋ハまをら
 入月小鵜イナカの毛のうもる雪
 雪射すいふれ露負れり

とせ成 相葉 東藤 玉山 葉 蕙

降雨は初る母は涙を
 一輪はあふし 昔菜の窓
 碁乃二丈二方困る目をめく
 周し帰ると 孤なりくさり
 遠き源河原 遙く暮るる
 夢表瓦たる 杉乃入口
 笠変て衣の破れ綴り最
 輝れ為乃 人喰ひあり
 一羽の羽分れ涙八月泣く
 霧れしらくみ跡をとく蹟
 山 菜 菜 山 菜 菜 菜 山 菜

花曇るるれば靡をたしむる
 友人のくさちぬじけろふ
 熱の聲はあふき懐と身を健く
 中流氣子ふも神をわたりわ
 木の葉を西尔御堂の礎を
 義小首屋の 十とくりふ申
 伊つくと 炮娘作ら祖父は
 系小名たりし 瘡の 呪咀
 石二巻根を笠をたてて
 麻ふり 鏡のひらり花を
 山 菜 菜 菜 菜 菜 菜 山 菜

待ふれ小鏡を懸ひ 扇をとり
 衣を片く小燈籠の戸をぬき
 月行ゆく町半に響きハツガリ
 糖いそぎ 滑りくの片由
 破れもる具を必ふとり
 言驚れ縣より 畠つらとして
 紅珠の底残ふとふれ香を焚き
 らひあきくやの長き日の依
 雲雨乃新發を糝花ひき
 青草——らひ後の擧^{ツホ}折

素 山 蕙 素 蕙 山 蕙 素

貞享二年三月廿七日

何とはり小何や床すまは草
 編り出交り 埴すり
 田螺も磯乃まの暖ふ
 云家一高くは竹れ中を
 月曇る言れ和桐の戸をぬき
 酒言映乃いかにあひく

芭 蕙 叩端 桐葉 蕙 端 蕙

双六の恨をきくに書はく
 登爪をくじ 社に移る書
 髪下に侍従。むすめおろくろ
 中くまはあ〜〜 岐王寺に証
 空持小文あるまるとかして
 藝者をとし〜 名月の園
 面白れ拉女乃社のねと〜
 燈風を〜の〜 紅あ〜
 川激流警を角に踏ま〜
 舍利を〜 流小物白福〜

蕙 棠 端 蕙 棠 端 蕙 棠 端 蕙

畧る石れ沖すれ花久〜
 肌織り〜 酒をか〜
 前々〜 女〜 螢おろり
 枕屏風の陰ふ〜
 寄り〜 節れ多之のを
 三枝の〜 深川〜 乃和
 庵 任や 独杜律を 味以て
 くれ幽あ〜 木〜 道の 書
 いくは〜 鶺鴒ハ 吹多と 負あ〜
 多 汲 小 借 神 記 也 久 久

端 蕙 棠 端 蕙 棠 端 蕙 棠 端 蕙

月夜く打板山を多しはくん
 暮ハ板壁れ 延坪ゆあり
 村雨の澄き控る馬の当
 心く何れ 瓜 喰ふ音
 笠今申れ人々しうと聞らぬ
 男やめれ 老う怨くも
 風くさ大寺の板の七つき
 御門を叩く 生経の奏
 老徳山 老望し助。とれ 喰ふ
 暮り一 孫に 連 前師の松

紫 端 意 紫 端 意 紫 端 意 紫

イこと板の瓦の神より
 引くりあやと播 築のあくら
 日氣山 新子れ 新をぬく
 清水を丁くふる 栞物あり
 面白くもく小 飯く 飯果の
 高乃今や け小 孫をと 喰

相 系
 芭 蕉
 叩 端
 黄 口
 東 蘇
 工 山

これ我小部の連歌 書けり
ききりしつりし二升れ浄す
高きより漁の唄もそてと
痛しけり鴨乃に五百の元
杉風の巻ふ酒を飲けり
佛と刻しむ西宮の傍
為解玉れ髪切女髪り来て
老を足後も別ほの
秋を程に味も物言ひたり
白子れたま 糸 芳の 海

山 糸 燕 瑞 蘇 口 糸 山 瑞 燕

波よけし縁の骨ふりれり
庭干す於朝のつらき
笠おきて鹿ふりて 瘦きとこ
ふ守の松のほりゆふれ
鶺鴒の尾を 瑞の園ふりけり
月を月をたかく 糸よの打死
筆をよそ朴の廣葉をり 境地
田舎より里にもめをたたる
おのりくお雲の言をたつ
たをれく 君と 酒笑ふ

燕 瑞 蘇 口 糸 山 瑞 燕
榊 瑞 糸 山 蘇 口 糸 山 瑞 燕

池乃袖一 鮎 遊をせり
 おほん 帰一 京の 河をらふ
 薩 類乃 東の 寺に 月 啼く
 猿も 此 雲に 何を 抱くう
 蝉一 鳴くまじ 深村に 秋の 光
 多の 屋 漁一 馬の 尾乃 琴
 秋に 来る 雲を 焼く 近の 中一
 入日乃 紅の 早ふら 山一 三
 言ち 池に けりも 花の 花く
 清一 一 此 兼 馬一 一 此 西 水
 楫 燕 棠 山 燕 端 藤 山 棠

貞享三寅年

日乃 雲を 吹いた 霧の 舟に 乳
 今きり 小た くるま 春の 相の 雲
 雪村 柳一 今 舟 揮 舟一 舟
 酒の 幌一 入 あひ の 舟
 秋の 山 舟 舟の 舟 舟
 炭 竈一 舟 舟の 舟 舟
 里一 舟の 舟の 舟の 舟の 舟
 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟
 其 舟
 文 藤
 枳 風
 コ 彦
 芳 重
 杉 風
 仙 化
 李 ト

船るこよの流をとれむみらふれん 挙白
 名佛よおふ 傍り川くまら 朱陰
 街ゆくくまの真とらるるん 蚊立
 歌をせまふ じつ川の群 千り
 有りの夜を打たけり 馬より空 芭蕉
 うき世の病を 高れんをくらめ 筆
 惜みけり 高れ本権の夜ふふ 鏡
 後任女 きあつてくらく 角
 山ゆく 乳をのむ様の群 交
 翁を甲斐の 花ともく 枳

法のとみ利髪を埋むらん 杉
 くらく 乳をのむ様の群 空
 嘆息を車かへる くれのかげ 卜
 橋々 小雨を もゆるけらふ 化
 雪 ぬるあふ山子れあつて 弦
 之川 けり 群をのむ 白
 殿守 眠り けり 群をのむ 群
 くらく 眉を けり けり 蕉
 嬰子 嘆く 情を けり 高れん 枳
 系 けり けり 矢 篋 切 入

人あつと〜れ物を、けきり
 酒もりいぢい 今山、ほり
 け玉の武徳を名ある 弦よかき
 京小汲する。醒みれ あり
 玉川やゆの〜ふのほろ
 江湖く〜ふ〜ふたにら
 卯のふれの皆精シラヤふしやるれ
 け〜ふ〜せは 花か〜ふ
 南む〜着をれ畑の霜消〜
 親と是を〜川 魚の片れ〜

揚水 弦 角 蘇 化 重 水 不 鏡

解作るあ〜れ唐やふをとり金
 贅尔買ふ〜 秋の〜らら
 麻の言を物い〜ぬ人いすつら
 ふ〜ふ〜ふ〜れ 衝〜ふ
 谷れ雨た〜り〜七里を〜る
 停泊 河内乃冬れ川
 水車 糸流〜音ハあ〜き
 栞〜あ〜りれ 院〜〜を
 おあ〜きれ蓬山 人〜も〜ふ〜や
 姉〜川 牛〜の〜〜日の影

枳 蕉 弦 卜 下 水 角 子 蘇 歟 重

約わえぬ 翠の 臨をゆりゆり
 かりいあつたに 雲れ川内
 雲のまをささぎ せてた之き
 本急きこゆ。 山陰ふり
 因をやりて休む。 胡月ね
 霧りしゆい ちつにれあひ
 同一所 雲と 霧ふ名ををて
 ちるらなうんせハ 蝶の
 三房うじよの 橋の
 わ〜ハ 雲つるあれ 霧れあ

下 化 陰 雲 卜 急 下 霧 沢 蕪

傾城を忘れぬきみよき
 経とこなう 雲の
 竹あさ 筆をうらに ちりて
 梅ささいふさいあほひなり色
 ちりあにるれ 打 次 清 ぬ
 蛇とる 秋乃 沖し ちり
 修勢を糸月 小旭の 身 籠 ぎ
 榊 ^{ヤキ} えらとまを 橋 造る 秋
 位をれ 治なる 代 ち ちん
 居士と 鳴る ちの 見

鏡 水 下 卜 化 水 疾 白 重 鏡

紅一牡丹 十里花 香を分て
毫すじ 谷了也 海をみく
岩根少し 此地 地蔵を 荷ひ 控
りくや 三并れ 着 法師 在
邊如 意々 一 一 一 一 一 一 一
策 陰を 何 中 一 一 一 一 一 一 一
之 以 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
子 葬 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
舟 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
厨 長 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

使 枳 菊 氷 重 化 無 角 硬 意

麻 運 乃 七 府 仁 控 一 花 香 一
連 流 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

白 卜

花 咲 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
懼 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
之 踏 本 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
米 一 升 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
名 月 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
校 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

芭 蕉 清 風 舉 白 芳 良 二 高 共 角

すく衣ふくむく一孔く落く
内外乃下向一つ也
既り立討は使はらむ
一良乃らきり 街のきり
松明く歌見むとりふ君はた
中く後子孔 水り流く
歌くもくくぬくまを望く
とくは候を 中りよ山寺
雪を巧機やありくく落く
虹のはり一也八日も白ひき

角 白 高 良 風 菊 燕 良 白 風

志河くそくハ温泉を碓氷月すに
くく川り麻乃くくく夫を愛
塔くくと軍ふ言ある物
をくくくく一孔くくく
條路く明乃風雅を是れ
たくくくくく 牡丹ちり
年くくく 妹く告く部く
片れくくく 英はく奉る
札焼て刀くくく 片くく
象くくく 尊を殿の山く

角 白 高 良 風 菊 燕 良 白 風

横のふらねおやうくよき屋々
 糸の月夜ハさうとととと人
 物とねくもの中む人乃智舞
 眉ぬく袖乃 翠羞ううつしき
 くのわくもあぬふはうちやうく
 じりり 買し 言れ山今ち
 新しさハ 良屋少推し 破れ袖
 何や ねくてし ぼ焼ぬ浦
 相国乃 徳たるん じ花とね
 車を かりて てるのやうく

高 雪 白 慈 良 角 風 慈 角 白

納涼れねくしに推さる和漢

月のあかりてすし

被風は小日新やとさる夕涼

とて成

煮茶 蠅 避 烟

素堂

合 觀 醒 馬 上

のらあゝ小田れろるる

月一 代 見 金 一 氣

堂

露 盤 漆 玉 涎

露^レ籬^レ顔^レ 執^レ與^レ
霽^レ浦^レ目^レ 潛^レ雪^レ

多^ク心^ヲ定^メて^モ少^ク心^ヲ定^メる^ノ者

玉^ノ如^ク花^ノ珠^ノ散^リと^振る

山^ノ伏^山 平^地

門^ノ一^番 門^ノ小^天

鶴^ノ鷄^ノ 窺^ニ水^ノ 鈴^ヲ

霜^ノ小^ノく^ノり^ノを^レ明^ルく^レ見^ゆや^け

勇^クみ^よふ^ノ初^ノ秋^ノの^新蒼^ノふ^をて

臨^テ谷^ニ 伴^ニ蛙^ノ 仙^ヲ

堂^蕉 堂^蕉 堂^蕉 堂^蕉 堂^蕉 堂^蕉

貞享四丁卯

猿^泊子^手を^懸く^うの^の

と^れを^ころ^みひ^るを^ト

時^を秋^ノノ^時を^ころ^ノ旅^ノの^時と

尸^をも^も絲^ノノ^風の^身

山^ノ陰^ノノ^川の^影の^あひ^と

式^者述^片ノ^早川^の水

著^るる^を定^めて^も定^める^を定^める^を

ゆ^らゆ^らと^定ま^り枝^を現^く杉

露^沾 芭^蕉 沾^蓮 其^角 露^荷 沾^荷

傘の縁をかくし〜らひひく
 芭蕉
 念む之〜 柿山の 氏
 露沾
 思ひれ 汗をうけしむ様の糸
 沾荷
 控〜 尸乃 よし〜えりしる
 沾蓬
 祈る民 五天のひ〜法もく
 其角
 髪ある僧に 禱つてきく
 露荷
 意を改 徳倉山乃 菊ふ〜
 前沾
 一〜 たりと白ふ 風葉
 とせ城
 月流く 夕立流ふ 寺に 蝶
 沾蓬
 衣を洗ふく 禪調〜 念
 之角

花咲く〜 集る 菊れ 扇
 前荷
 歌板 むらふ 山ふ〜の 橋
 沾荷
 位流流や たられ 後の 雲流
 露沾
 聲〜 仰〜 鳥 帰〜 人ら
 活漁
 楢の葉ふ 糸又 集を 書と たり
 とせ城
 中〜 け〜 け〜 つら の あり 流〜
 露荷
 物〜 け〜 のひ あり 月 流〜
 沾荷
 琴を 吹す ね ねれ あり 屋
 沾蓬
 るを 下りて 整 結り せ 秋 の 節
 露荷
 九 掃 指 さん 尾 上 とも 夕 暮
 露沾

凡の和とさうふ種族のいりく 沾蓮
 大口とさうふ 庭乃 音拂 七世
 久もさうふ鳩の群立の本まひく 露沾
 独 蒼を 編く 凡 沾荷
 一軸乃 形見れ 連袂 露 高荷
 名を 恥ぬるさ 越のたぐい 露沾
 面うけて 鏡しむふととつ夫 沾蓮
 今何しをのほさう 獅ふれ 沾荷
 穢^穢 穢とこれの跡れを 沾荷
 柳の水乃 七 沾荷

江戸あうさ心うらんいり 鴉子
 薩 薩れ 母とさうふ 芭蕉
 貝もさうふく 水 穢なれて 嵐雪
 碎してハ人乃 肩とさうふ 其角
 夕ふの空のり 鳥り 祖父の 蕉
 根うけ 苗杉 輝の 子
 池の橋わさ 始ね 垣ゆい 菊
 今れと入帆の 雪

世の中を盡すのうらむる葉の烟
 妹ののしられしとやうしこ
 形えこふ袋乃切のそつこ
 ゆめをよきく園乃 松風
 津のおれきまはくとあうりく
 之ねまきりれ ぼくしゆいん
 一考の連鉄をともむけ寺ふ
 苗代もゆる 雨こまうなり
 海のれ葉のいとわらわすまはく
 孫宜りりかゝる 暮れ夕月
 子 蕙 雪 子 雪 蕙 子 雪 蕙 子

あゝ葉や人をうらむる葉の烟
 とまわりと 連ふ 入 葉の 音
 年のあたり了負け 津し
 心をたぐふ葉の星うらむる
 海うらむ ねらりしち子 孫の月
 甲よとらんすふ一せし
 子 蕙 雪 子 雪 蕙 子 雪 蕙 子
 子 蕙 雪 子 雪 蕙 子 雪 蕙 子

幽卷一

た刀持る事のゆれて家一は
 車のみをたつてむすむす
 身も友川地蔵紫花
 うけいと風子いらと指りん
 振うところには馬くおしり
 御教合めるとらさるる
 か着川の海を約のやたほむ
 暮らりりりれ 市原のあり
 贈代つた杖了夕まくれ
 牛を彩うた月のさゆふね

化 子 角 化 風 子 化 角 文 子

花のりと志ハの老とけしはくれ
 枕うささるる 一玉の碑
 朝うけと曇者を海へおとさく
 河のうささるる 燈と乞
 妻うささるる 酒と乞
 らハ婿と 妻と乞のたは
 比の村をハわくれのささるる
 水ぬりしき 納まきしき
 片道の老屋のむす角入る
 伊勢のりいささるる 妻と

下 角 下 角 子 子 子 子

負暄まゝや吟さすの羽よとん
 るうれお破る切露 ねくけ
 月入る電光る 膚 下
 こゝろの方と 若くやさき米
 塚の下母さくくむ杖の尻
 邦を軍にくとくはりもら
 られのおくまらう言に待らま
 下く組とゆるは自由 常

化 下 子 角 敏 化 下

貞享四丁卯年

甲斐れ園をみるもやうららり
 舟 湘うた 琴れうしと火
 築山のぞくれと柄を極うけそ
 あうよ小猫のきくく進けく
 響のきく 吾をうし月のはのこ
 をうれちうしの中くもまら風

芭蕉 安信 自笑 知足 業言 如風

一里乃 慈母なる川上た
初 ちり多く 門うをひこる
市 ちり多く 心を 柳を
く ぬれ 音 せき 子 子
叔 印れ 音 せき 子 子
月 を 行 へ 螺 貝 の 酒
言 ぬ 小 甲 を 切 け け 群 の 風
わ たり せき 子 子 子 子
為 作 西 け せ け せ け
本 流 け け け け け け 枝

重 辰 言 之 位 風 矣 是 辰 位

嘆 せ け け け け け け け
山 け け け け け け け
幸 螺 け け 油 け け け け
角 あり 眉 け け 化粧 け け 霜
待 育 の 命 を 喰 け け け 内
祈 け け け 枕 あり け け
深 け け け け け け け け
鹿 子 け け け け け け け
式 日 の 日 け け け け け け
流 け け け け け け け け

辰 風 之 位 風 言 是 辰 辰

探干に願う〜ゆる夕すこ
 笠もてあふ川〜菅太のふけ
 初月小外里の娘乃新通ひ
 す〜きくはよ〜く 荆 袖川
 朝霧さつ〜さけは鶴の嘴さ〜
 赤く絲〜さ〜く なが〜く〜
 氏人乃唐書を多きし花市〜
 加藤飛い〜むれのみさ〜
 田を〜すあ〜り〜に山乃名を〜
 〆は〜の外小 蹄を〜〜

守 佐 風 言 矣 辰 意 之 矣 意

旅人と家名もやらむ笠を〜
 何〜つ〜さ〜く〜 魂い〜
 宵明の袖の本蔵を新〜
 身よ〜り〜たり 庭の 砂を〜
 小池つ小弱ひき向ふ〜
 稚の〜つ〜枝を携〜
 廣〜子〜あ〜む〜ら〜村の雨を〜
 老〜る〜〜〜 夏〜の〜〜

如 行 志 行 相 志 行 意 行 意 行 意

二つ三つ反南れ 鴉あきつて
 明けれいのちれ 飯あつり立
 渡を舟ねも明るにやぐさ
 障いくとるあゝむうう
 せはるり別乃存も一と
 ちとをうく 鄙一の後折
 髪はつる 態の油煮あつて
 才ふ 瘡あつて 癖はねる
 弱差れ外ただとをき月のお
 やうう ままのちうあゝあ

重辰 位 笑 意 之 之 風 位 之

小神そむれ 風もはよ下
 こくく 猫の 子を控えて
 うきうきをりて 木もやぶぬ
 父のいくらを 起すの差
 松ふにがし 葉骨 波の息
 翅をうきよ 鳴一つい
 勢あゝる 垂と朝日をいさきで
 之房 汗したる 勅れと恙
 山さ。 車あつる 木を存い
 煙あゝる 岩を打りく

辰 位 之 意 笑 言 矣 意 之 位 之

澗水漱ふ石の法の如く
孤のうきき 暮れにけむる
殿やれく月をむくれ孰る
老むくくく くら母打音
ふけりり 梅の煙のきく
陣乃りり 碁を作る
山乃りり 積もり雨のあ
草を助なるん 草のきく
花ありり 文を集る 空用て
池煙かきき 井垣の梅

風 笑 言 蕉 辰 信 風 之 言 草

貞享四年土月廿四日

今きくわく 契田北水禁
ふきききき

塵世のくく 清く言はふ
ふきき 庭れけむわく
時くわ 松の葉風や
糸 鳩く 山乃りり
輝くれて 月さふ 星のきら
ほ急より 山乃りり

芭蕉 桐葉 糸 葉

机を〜〜〜のぬ所を獲〜〜
 こほ〜〜〜整えれ〜〜 活カ
 所〜〜 狩り〜〜
 和妙〜〜 堀り〜〜
 古細〜〜
 物〜〜
 松の〜飯〜の風
 冬〜〜の〜
 就中〜〜
 温泉ハ〜〜

蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨

け塚の女ハ〜の〜
 た〜
 朝〜
 水〜
 舟〜
 舟〜
 舟〜
 舟〜
 舟〜

蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨

打ゆふも雲ふも似る古ひをして
 縣の齋一志しる自る秋月
 秋山乃依松を告る一志しる
 今ら一節を新しむる蓋
 優游塞々沖一廟はあゝ文をく
 為人起以 世を明りたり
 急素よぬ北紫の片雨の音
 多 穉の存る 鳩牛くうき
 西行の志をふるふ花咲き
 去乃たらむに 敬うらむり
 菖 菖 菖 菖 菖 菖 菖

貞享五年

信の布れ花とハハハハ白い乳
 しとろし 物目をさくせ 菖
 志ふくは布れ松を告るきく
 二葉のひがれ 沖幸待たり
 今朝の志を告るふ川つと
 ねあめハハハハ 菖の油火
 七葉 益光 又玄 平唐 務延 清里

花うきくきみんたのこゝ藤の藤
 一くく月く銀香吹ちる
 後うけておとれ月と見あひり
 こころとまをむと家の園もさ
 親もとり葉のよみ水と歌つる
 よし神風をよみ代に代に
 け坊をゆきよきやちり風
 ゆきこむ揖ふ船つるこりり
 りのふれらとるを花と見あひり
 経丹乃とみ神一垣のま

玄 延 人 房 克 翁 永 正 玄 延 人

花根越人もあると物の子
 舟り焚火を入るる川の水
 正六町布細子糸あてて
 碇もれはくさの舟り
 明もさもあつた月乃酒きこむ
 薪一くさよれとまれぬ

越人 登水 如行 延雪 若兮

帷子に拾形殿も 秋先ふて
 食ふ稿 之原さし田舎なりは
 神まも常ハ入りこゑ居りき
 境々すく 藪のしと川
 とやくと還却乃はく崔泊て
 泣やうすゆ 念佛
 一のい入をぬりて故ふりれ
 浮名しれつる月ののりる
 長衣をう流居眉のきこる
 人小たりれきふをわたりぬ

水蕉行水人兮行雪蕉

是乃かえよきと持心を離るる
 こころを極を極 幕串
 下こころ強まふ句れ御詣り
 あはれきこい 吟ふ人乃とこころ
 とろくと一扉入しと目れき
 書ゆれ雨死 鐘とけりて
 さらけくハ今れ園染れ落し也
 其懸ふしと今のおりの父
 布しとち母被れ改背れ秋の風
 了りしとの月松崎の月

人乃蕉水乃人兮行雪兮

雪のふりて家もぬるまじくしらけたり
 竹のうへにたづねて遊くゆりね
 流れてきてきやうりれき早のき
 あつたあにうら別し色き
 世の中一乃菊の金葉のう焼くはれ
 孫しよこまをきまらひこらんき
 旅しうも尾張のまれ十葉の
 富士のまにかき又馬よの
 懐よあらうまふまを
 うひかうくに 柳の流るる

雪 蕉 水 新 兮 香 蕉 水 竹 人

花はほろりてあふれ思ひあり
 美穂波もるるほひ乃す急
 ニつーくまきすのくすたうして
 かに神をりけり名所記
 伝うれく月さけ程れ浦つ伝
 うれとこりの 岩の風音

芭蕉 知足 桐葉 叨端 業言 自笑

松のこころつらよふ麻の年ふりて
 雲か岩をこころよーとて
 今られへ乃去と一唱去りて
 去者の輿りー皆を投て
 りつ指をさるよ下給うは
 峯さつそつる 八百の巻
 表透りし物さつこつら幽物
 子をゆりよ親乃月ありて
 其れの秋すねるま打れは
 猫なつと移と 考味は

如風 安伝 重辰 蕉 是 葉 瑞 辰 桐 風

有部の心六首とて女これとて
 袖の巻る麻を 巻物さつと
 流さつと短冊をてはつと
 飛りつ流きを背負ふさつ
 てさつと袖り無とてさつと
 五日乃風の巻 雨乃宮
 葉子巻も木つたての巻物さつ
 去られ外面 たら名物さつ

伝 辰 蕉 是 葉 瑞 辰 桐 風

2
人
1

四十三



